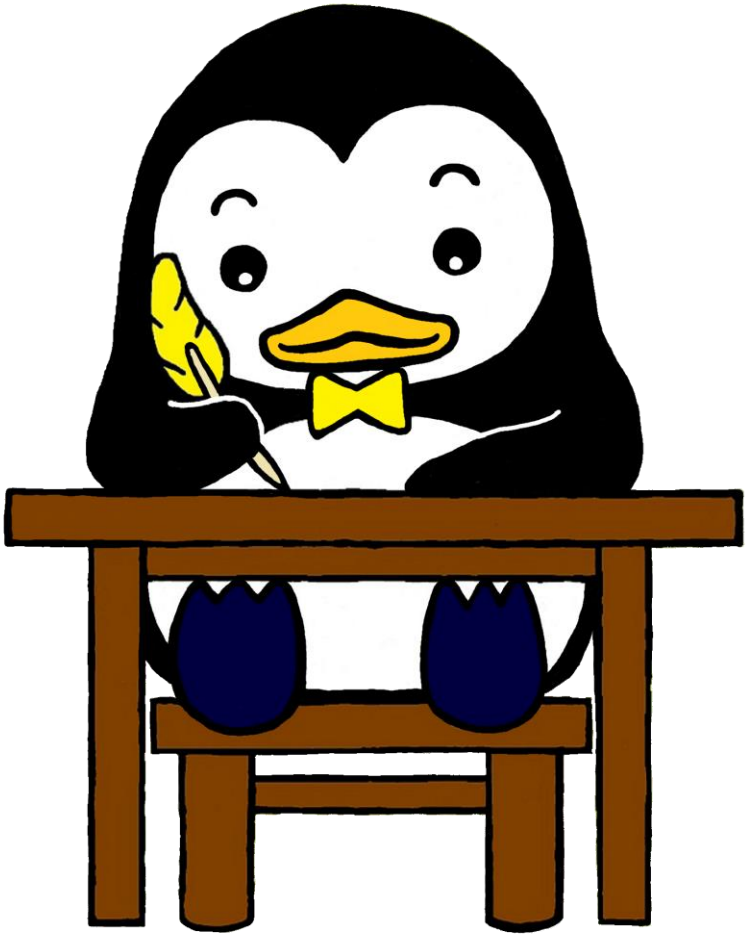
第７４回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

調布市推進委員会
優秀作品集



目　次

社会を明るくする運動 …… 調布市立第三中学校　一年　芦澤　舞　1
寄り添う心 …… 調布市立第三中学校　一年　太田　佐和　3
「今，私にできること」 …… 調布市立第三中学校　一年　黒沼　稟　5
認め合い，受け入れる。 …… 調布市立第四中学校　一年　渡辺　千紘　7
共に …… 調布市立第六中学校　二年　角堂　華衣　9
心の小さなあかりを絶やさずに …… 調布市立第六中学校　二年　福永　絢　11
未来を守るために～私達にできる再犯防止の第一歩～ …… 調布市立第七中学校　一年　山下　真輝　13
支え合って生きていく …… 調布市立第八中学校　二年　矢野　瞳美　15
私にできること …… 調布市立第八中学校　二年　木下　里乃　17
相手を知ること …… 晃華学園中学校　三年　岡本　華奈　19

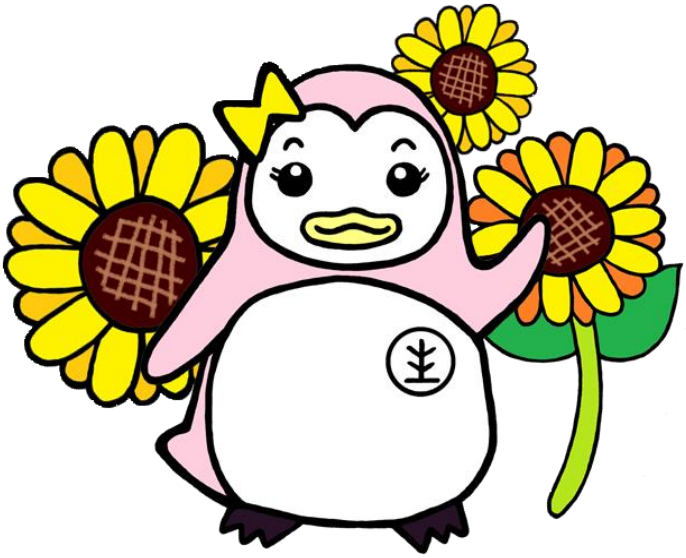
社会を明るくする運動

調布市立第三中学校　一年　芦澤（あしざわ）　舞（まい）

私は，人が良くないと思うこと，犯罪を行ってしまうことには，必ず理由があると思う。例えば，相手がノリで言ってしまったことが本人にとって，思っている以上に傷ついていることがある。それが積もって犯罪に繋がっていってしまう。私は，恨みなどを人にぶつけるのは，だれかに自分の思いに気付いてほしい，そのような考えがあるのだろうかと思う。世間でよくあるのは，犯罪を犯してしまった人に対して，小学生の頃は良い子だったのにというコメントを寄せる人が多かったことだ。なので小学生も中学生も大人もどの世代の人でも，防げることはあるのではないかと思う。

私の小学校では，必ず道徳の授業でふわふわ言葉，とげとげ言葉について学ぶ時間がある。しかし，どんなに授業で気を付けようと言われても，教室内でつい暴言を言ってしまう人は多く，気まずい空気になってしまったり傷ついている人がたくさんいるような状況だった。しかし，私の仲の良い一人の友達だけは違った。その子は，暴言を言う子には，注意を呼びかけ，傷ついていた子には大丈夫と声をかける。そして，周りの空気を和ませられる面倒見の良いこともあるという，完ぺきな子だった。私は，どうしたらそんなに周りに配りょしながら過ごせるのかを聞いてみた。その子は学校生活をたのしくさせるのにはみんなが気持ちよく過ごす以外ない，そう言っていた。当時の私にとってそれはとても衝撃的で，感動した出来事であったと思う。今思えば，当たり前のようなことかもしれないが，全力で毎日を過ごす友達を見ると，とてもはげまされたような気分になって，がんばろうと思えるようになった。私は，なにかに傷ついて，落ちこんでしまったわけではなかったが，目の前が明るくなって，肩の重りがとれたように軽くなれた。それだったら，何かに傷ついてしまっていた人ならば，もっと毎日が楽しくなるくらいにはげみをもらうことができるのではないかと思う。いじめられたりすると，何もかも投げ出したくなるような気持になるかもしれない。そのような人がもし自分の周りにいたら，みんなが悲しむよなどを言うのではなく，その子が今まででがんばっていたことや，大丈夫だよという簡単な，シンプルな言葉をかけてあげる。その分，自分にも自信が持てるようになり，前を向いて，今後過ごしていこうと思えるかもしれない。

テレビのニュースで犯罪の話題があがったとしても，自分には関係ないとは絶対に思わないでほしいと思う。考えるのは，そのような出来事を，「自分の身近なところから起こさないためにはどうしたら良いのか」だ。私は，今後の人生で相手に褒め言葉を使っていくことを心がけていきたい。犯罪に繋がるかもしれなかった感情を今のうちから守ることは必ずしも全てできることではないけれど一つや二つだけでも防げるのであれば，それは，とても立派な「社会を明るくする運動」だと私は思う。



寄り添う心

調布市立第三中学校　一年　太田（おおた）　佐和（さわ）

私の父は裁判所で働いている。これまでいろいろな種類の裁判所で勤務してきたが，最近は横須賀の家庭裁判所で少年事件を担当している。

私の父はニュースなどで少年事件のことが流れると興味深く見ることが多い。また，事件について私にも簡単に説明してくれたりする。今まであまり関心を持ってニュースを見ていなかったけれど，父の話を聞いて，私と同じような中学生が起こした事件や未成年の事件がたくさんあることを知った。そのような事件を起こしてしまう人たちと私たちは何が違うのか。なぜ事件を起こしてしまったのか。普段身近に感じることはない少年事件について考えてみようと思った。

少年事件では十四歳以上二十歳未満を対象としていたが，二〇二二年四月一日から十八歳十九歳を特定少年として，十四歳以上十七歳以下の少年とは異なる特例を定めた。これまで少年法で守られていた二十歳未満の人たちも，成人と同様の処罰を受けるように変わったのだ。少年事件であっても，きちんと処罰をしていこうという流れがあるのだと思った。

少年事件で最も多い犯罪は窃盗だ。これには万引きも含まれていて，友達と遊び感覚で犯罪を行う共犯事件のケースも多い。次いで傷害や暴行事件など，さらに強盗事件などの凶悪な犯罪もある。このような犯罪を犯してしまう理由は何なのだろうか。

家庭裁判所で審判を受ける際には保護者からも話を聞くことになるそうだ。私は父の話を聞いて，この保護者との関わりに問題があるのではないかと思った。

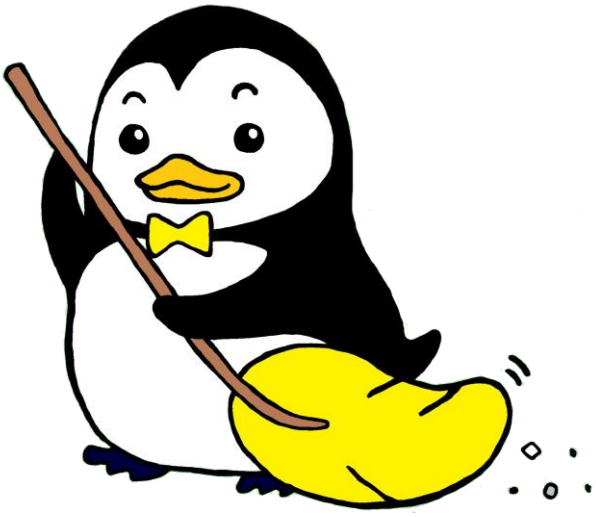
例えば，私が夜，友達と行先も言わずに出かけようとしたら，絶対に親に止められると思う。母は私の友達のこともよく知っているし，その子の親とも連絡が取れる関係にあったりする。万引きに関しても，小さい頃からしてはいけないことだと教わってきたし，それがなぜいけないのかということも教わってきた。万が一私や姉妹が万引きをしたら，きっと顔を真っ青にしてお店に謝りに行くと思うし，ものすごく悲しんでとことん話し合うことになるだろう。父に聞くと，審判に来た少年の親たちは子供に無関心であったり，呼び出しにも応じないケースもあるそうだ。一方で，過干渉で子供の全てを管理し自由を奪うような関わり方の親もいるそうだ。少年が非行に走る理由にはこのよう

な家庭の環境，特に親との関係があるのではないかと思った。

それでは，そのような家庭の子供が非行に走らない為にはどうしたらよいのだろうか。私たちの置かれる環境は家庭だけではない。学校もあるし，友達もいる。家庭に居場所が無かったり辛い思いを抱えている子供を見過ごさないで関心を向けること。また助けを求められる福祉の窓口があるということを知ることが非行を減らすことにつながるのではないかと思う。

犯罪を犯してしまった少年はその後どうなるか。まず家庭裁判所調査官の面接を受けることになる。面接では，家庭や学校のこと，これまでの生活履歴などを聞かれる。面接は少年以外にも保護者や学校の先生などとも行う。面接が終わった後は，家庭裁判所に送られ審判される。審判では，家庭で社会生活を送りながら更生していけるかどうかが焦点となり，やはり親との関わりが更生の場面でも最も重要になるとわかる。審判で，家庭で社会生活を送りながら更生するのは難しいと判断された場合には，教育を行う少年院などの更生施設に送られる。施設での生活をきっかけに少年は更生への道を歩き始めることになるのだが，少年院を出た後再犯で再び少年院に戻ってきてしまう人は多い。そうならないためには，信頼できる人，親が無理ならそれに代わる人が近くにいて再び非行に走ることの無いように見守ることが重要だと思う。無職の場合の再犯率が高いので，きちんと職に就くということも必要だ。社会が偏見によってその機会を奪ってはならない。

これまであまり身近に感じることが無かった少年事件だが，父の話を聞き，現実には多く起きていて，家庭環境や親との関係に問題を抱えている場合が多いことが分かった。決してそれだけが原因ではないと思うが，そこから更生していく時にもサポートしてくれる人物が必要であり，周りの理解や寄り添う心が少年事件の抑止や更生につながっていくのだと思った。



「今，私にできること」

調布市立第三中学校　一年　黒沼（くろぬま）　稟（りん）

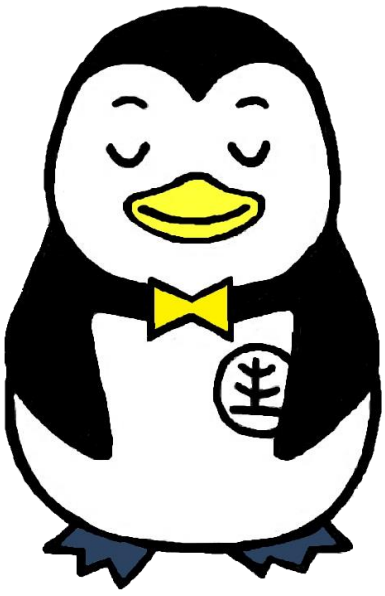
私はこの作文を書くまで，犯罪や非行についてあまり深く考えたことがなかった。テレビやネットで犯罪のニュースや青少年の非行の特集番組などで観たり聞いたりすることはあったが，あまり関心がなかった。なぜかと言うと周りの環境において非行や犯罪は身近ではなかったからだ。私自身は，父，母，兄妹の家族五人で多少の喧嘩はあるが毎日楽しく暮らし，普通に生活を送っている。身近な友人や知人も同様にそう思っていた。しかし，夏休みに勉強の合間にスマートフォンを見てると，「お母さんが怖いので，家を出ました。」と言う投稿を目にした。お母さんから暴力を振るわれているのか，原因は分からないが，こういう投稿は検索するとかなり多いことが分かった。『身近にもしかしたら「生きづらさ」を感じている人が沢山いるかもしれない』と思い，私には何か出来ないのか。と考えるきっかけとなった。

何をしたらよいのかも分からなかったが，スマートフォンで「調布市ボランティア　社会貢献」と検索した。色々情報はあったが，今の小さい子どもについて知りたい気持ちがあったので，近くの認可保育園でボランティアをした。０歳児から五歳児の未就学児が一二〇人程預かっている保育園だった。最初は沢山の子どもたちの前で緊張したが，得意なお絵描きや身体を動かすことをして，一緒に子どもたちと沢山遊んだ。「一緒に遊ぼう」と誘ってくれてとても楽しかった。降園時間が近づくと保護者の方が迎えに来るときに，先生とお母さんが何やら真剣な顔をして話し込んでいた。ボランティア後にその先生に何を話していたか伺うと「お母さんの子育ての悩みや相談を受けていた」と話してくれた。保育園の先生は子どもを預かることが仕事だと思っていたが，保護者の悩み相談を受けていることがわかった。今の保護者の方々は，子育てに悩んでしまう事が多いと伺った。保育園の先生は，その家庭やその子どもに合ったアドバイスをし，少しでも保護者の方たちが子育てしやすいようにしている。息詰まった保護者は，子どもに虐待などをしてしまわないように，保育園の先生は家庭ごと守っている，社会に貢献している素晴らしい仕事だと思った。私も少しは携われ，色々なことを知ることができ，良い経験となった。

もう少し夏休みを利用してボランティアを行おうと思い，ネットのボランティア検索を続けると，気になった活動があった。「ママと子どもで楽しく安心して運動ができ

る場所～家庭の笑顔を支える～」というＭＡＭＡ　ＮＩＣＯという団体サークルを見つけた。運動が家族の支えになるのだろうか。私は五歳から水泳を習い，今は選手コースで週５日泳いでいる。運動には多少自信があるので，運動することが役に立つのならと思い，代表の方にご連絡をし，ボランティアに伺うことにした。日曜日にある施設の部屋を使用し，親子別々で運動をしていた。お母さんたちは，ヨガやバランスボールなどで汗を流し，子どもは年齢に合わせて身体を動かしていた。私も一緒に動かしながら，子どもたちのお世話をした。お母さんたちは，最初来た時よりも運動が終わると，笑顔が増えリラックスしていた。このサークルを始めたのは，自分の子育ての体験から，お母さんたちが体力的な面と精神的な面を支えたり，社会から孤立しないように，悩みを解消し，心と身体を楽にさせてあげたい気持ちからだとお聞きした。運動することは，身体的効果もあるが，ストレス発散やリラクゼーション効果，うつや不安な気持ちの予防や改善に繋がるメンタル的効果もあるようだ。私もイライラしていたことがあっても水泳で身体を動かすと頭がすっきりしていたことが何回もあった。子どもを持つと，母親と子ども一対一でどうしても社会から離れてしまい，誰にも相談できず一人で悩みを抱えてしまうことがあるそうで，親子で運動して，色々なことが良い方向に向かうことが出来るこの活動はとても良かったし，これからもお手伝いしたいと思った。今回この活動に参加できて，運動の素晴らしさを改めて知り，今の私にできることも発見できた。

他にも私の住んでいる地域には，子ども食堂を実施したり，子どもたちとキャンプに行ったりと様々なボランティア活動が行われていることがわかった。今回この作文を書くまでは関心がなかった犯罪や非行についてだったが，防止するために直接的な活動ではないが，沢山の大人の方たちが関わり，誰でも平等に笑顔で明るく生活ができるように支えていた。このことが，社会を明るくする運動に繋がることだと沢山の子どもたちの笑顔を見て思った。私もこれから色々な活動をお手伝いし貢献できればと思い，積極的に参加していきたい。



認め合い，受け入れる。

調布市立第四中学校　一年

渡辺（わたなべ）　千紘（ちひろ）

「おはよう」
「ありがとう」
「大丈夫？」
こんな少しのあいさつが
こんな少しのほほえみが
そんな少しのやさしさが
平和を生んでいく

当たり前かもしれない
でも，ほんの少しの行動を
してもらえない人がいる

ほんの少しの行動が
増えてたくさん集まれば
大きな平和になっていく
あなたの私の行動が
大きな平和を生んでいく

この詩は，私が小学六年生の時に書いたもので，札幌市平和へのメッセージといった内容で入選したものである。

今，私の身の回りで「いじめ」が起きているわけではないけれど，「いじり」というのが起きている。

私は中学生になって，北海道から東京に引っ越してきた。新しい環境に，新しい友達関係，最近は，やっと慣れてきたけれど，慣れるにつれ一つモヤっとした違和感を覚えるようになった。それはクラス内での「いじり」だ。小学校と違って，授業時間は長くなり，課題にテストにと，少なからず自由な時間が減ってきたから，なんとなくつまらなかったり，ストレスを感じていたりしていたのかもしれない。入学時には，はっきりとした形ではなかったのに，いつしか暗黙の了解でクラスの「いじられキャラ」が決まっていた。可愛がられているのか，本気で馬鹿にされているのか，それは「いじめ」か「いじり」の境界線のように思えた。

どうして，いじりが始まるのか。いじりの一つの原因として，からかいの対象者を取り巻く，周りの人の気持ちの問題が大きく関わっていると思う。少しだけ何かが自分と違う気がする，大勢の人の中で見た目や考え方が違っている。それだけで，少しずつ皆の接し方が変わってしまう。クラスの中心人物や目立つ誰かがいじり始めると「いじっ

ていいキャラなんだ」とでも承認されたように，いじりが始まる。それが悪化すると，知らない間に「いじめ」に変わるのだろう。そのまま，いじられキャラはからかいの対象として扱われ続けたら，本人は自信を失くし，みんなの前に出られなくなってしまうかもしれない。それは，罪や非行を犯した人でも同じではないだろうか。たとえ心を洗って出所しても，罪を犯した事実だけがずっと残ってしまう。もし，やっと社会に出ても周りから軽蔑され，見放され続けたとしたら，その人はいったい誰に本当の自分を理解してもらうチャンスを得るのだろう。

任事に就けずにまた再犯している人はとても多い。なんと再犯している人の七割は無職だという。再犯理由として，「人間関係がうまくいかない」「地域でも孤立してしまう」という孤独な気持ちになったとき，また悪いほうへ誘う友人出来てしまう事もあるそうだ。もし，過去になんらかの過ちを犯してしまった人でも，周りの人が本質を見抜いてありのままを受け入れようとしていたら。「再犯」は周りにいた人の行動次第で防ぐことが出来るのかもしれないと私は思った。

大勢の人と違っても，間違ったことを過去にした経験があっても，その人が生きる地域社会の全員に自由でありのままを生きることができる人権はあるはずだ。

ほんの少しの心無い言葉が人を傷つけることもある。でも，ほんの少しの挨拶や優しい声掛けが，人を救うことだって出来るのだ。

共に

調布市立第六中学校　二年　角堂（かくどう）　華衣（けい）

なぜ人は罪を犯し，そして再び罪を犯してしまうのだろう。

中学生になって，私はバスケ部に入った。始めた当初は，バスケが大好きだった。だから，沢山努力して，三年生が引退する頃には，同学年の中で一番上手になっていた。ある試合では，二年生の人数が足りないため，私がスターティングメンバーとして出たりもした。そんなこともあって，皆から「すごい。」とか，「羨ましい。」とか言われた。私は鼻が高かった。

夏頃，私の親友でありライバルが，どんどん力を伸ばしていた。このことに私は焦りもしたが，大丈夫だろうと油断していた。

それから時は過ぎ，今は二月。大会も間近。この大会は二年生がメインだが，「出られないかもしれない。」という心配はなかった。でもやはり，神様はちゃんと見ていたのだろう。

本番，私は試合に出られなかった。それなのに，友人は，沢山試合に出られたうえに，大いに結果を残した。悔しくてたまらなかった。それと同時に，友人への憎しみを覚えた。

それからの私は，バスケへの熱意を失い，当然ながら実力も落ちた。今では私の実力は五番目。私は自暴自棄になって皆を憎んだ。本当は努力しなかった私が悪いことは私が一番よく分かっている。それでも憎んだ。

そんなことをしていたら，私はバスケ部の中で孤立した。別に避けられていた訳ではないけれど，同学年のメンバーはどんどん先にいってしまうのに，私は一歩を踏み出せず，先へは行けなかった。

とうとう私は，母に退部の相談をした。母に理由を聞かれたが，自分の惨めさを隠すために嘘をついた，

「顧問の先生は怖いし，勉強に専念したいから。」

と。すると母に，

「皆に抜かされたことを，言い訳で誤魔化している。」

と言われた。正論だった。

その日の夜，考え尽くした末に，退部しないでもう一度一番になることを決意した。それを告げると母は私に，

「頑張れ。」

と言って，背中を押してくれた。その瞬間，一気に憎しみが消えていった。

それから毎日練習を重ね，努力し続けることで，以前のように試合に出る機会が増えていった。私は今も全力でバスケに取り組んでいる。

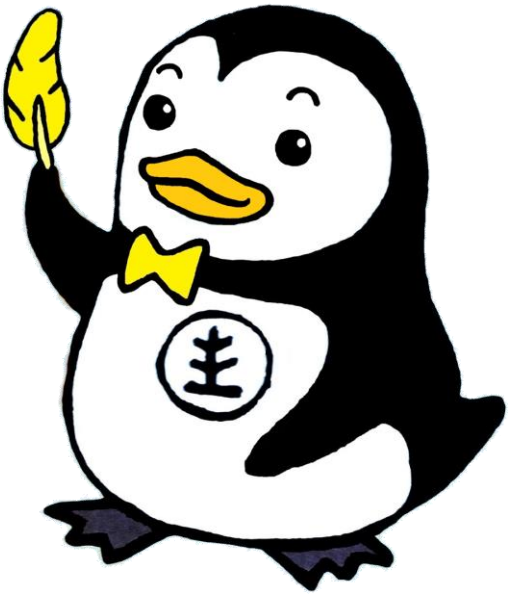
なぜ人は罪を犯し，そして再び罪を犯してしまうのだろう。私は，「憎しみ」が原因だと考えている。「憎しみ」は他人の存在だけでなく，自分自身の心も平気でむしばむ。でも人は，それを全部一人で抱え込んで，必死で隠そうとするから，自暴自棄になって他人を恨み，そして誤った道に突っ走る。誰も見てくれないし，助けてくれないから，寂しくなって再び犯罪を犯す。「憎しみ」とは，負の連鎖である。

そんな時，私の背中を押してくれた母のように，どんな状態のときも見守ってくれる存在がいることがどれ程大切なことか。

だから私達も，加害者の憎しみに気づかなければならない。加害者の心が壊れてしまう前に。

でも，簡単には気づけないから，常に見ていよう。もしかしたら，今もどこかで，必死にＳＯＳのサインを出しているかもしれない。

全ての人に目を向けるのは不可能だから，まずは私の周りのクラスメイトに目を向け，誰かが出すかもしれないＳＯＳのサインを見逃さないようにしたい。そして，一緒に背負おう，人の心の裏の裏にある「憎しみ」を。



心の小さなあかりを絶やさずに

調布市立第六中学校　二年　福永（ふくなが）　絢（あや）

私の祖母は，更生保護女性会という活動をしています。更生保護と聞くと私は罪を犯した人と直接関わりがある怖い活動をしているのかと祖母のことが心配になりました。

しかし，夏休み帰省した際に祖母から更生保護女性会の活動の話を聞いてみると，実際は，地域の養護施設，保育園や幼稚園に行ったりして，園児と色んな遊びや歌，ダンスを一緒に楽しんで交流しているそうです。

私は，「小さい子供との交流がどうして更生保護に繋がるの。」と祖母に質問すると，祖母は「子供に声をかけて一緒に触れ合っていると，おばちゃん来てくれて嬉しかった，面白かった，楽しかったと声を掛けてもらえるのも嬉しいのよ。友達と一緒に遊んだりする中で，友達が失敗している時に何してるのと怒るのではなく大丈夫頑張れ！と応援ができる仲間づくりをして欲しいと思っているのよ。」と話してくれました。

また，それがのちのち大人になっていく時の悩みや辛い思いをした時のちょっとした気持ちの支えや非行に走らない温かい雰囲気作りになれば良いなと思っている。と自分の活動に対する思いを話してくれました。

祖母の話を聞いて，非行にどうして走ってしまう子供がいるのだろう。私はどうして自分は非行に走らないのだろうと考えてみました。

まず，私が非行に走ったらどうなるのだろうと考えてみました。ふと，最初に悲しむ人の顔が頭の中で次々と浮かびました。両親や友達，親戚の人，学校の先生など，色々な人の悲しむ顔が次々に浮かんできて胸が締め付けられ，嫌な思いが湧き出てきました。だから，絶対悲しい顔を大事な人にさせたくないと思いました。

その次に，いつも，どうしたの？大丈夫？と気にかけてくれる周りの人からの温かい気持ちを思い出して改めてとても心が温かくなり安心感に包まれた気持ちになりました。

一方，どうして非行に走ってしまうかと言えば，私の叔父が昨年，通勤で使っているバイクを駐輪場に停めていたのにも関わらず盗難されたことがありました。盗難をした犯人はＳＮＳで叔父のバイクを転売しようとしていたそうです。叔父の知人がバイクの転売をネット上で見つけ出し犯人が誰かを突き止めてくれました。ふたを開けてみる

と犯人は，私と同じ中学生数人で，学校にも行っておらず，家にも帰っていない少年だったそうです。叔父は，まず警察に行く前にその少年の一人と話してみたそうで，盗難した理由を聞いてみると，

「先輩に指示されて，お金もなかったのでやってしまった。」

とのことでした。色々と話をする中で叔父は未成年だったこともあり少年の保護者にも連絡を取ったところ，

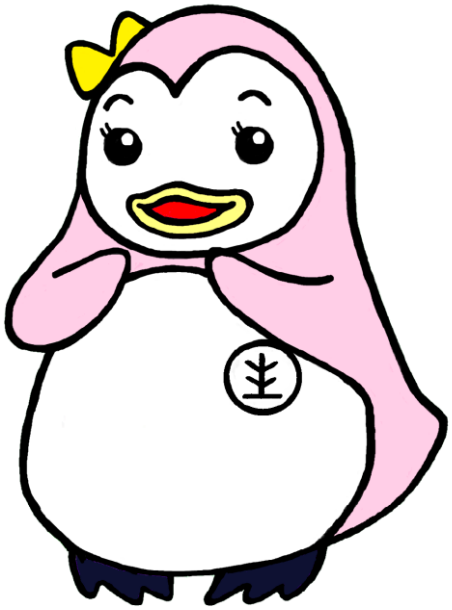
「壊れた部品の代金はお支払いします。」と，最初に謝るでもなく，怒るのでもなくただ無関心で事務的な対応にあっけにとられたそうです。

テレビのニュースで，ネグレクトや虐待のニュースを目にすることもあります。人は追い詰められたり，いっぱいいっぱいになると感情を人にぶつけるか，モノにあたるか，自分にあたってしまう，と見たことがあります。叔父のバイクを盗んだ少年も最初はきっと笑顔の絶えない少年で，周りの環境や大人からの無関心や，自暴自棄が負の連鎖となってあの様な事件を起こしてしまったのだと思いました。

今回バイクを盗んだ少年もお金を弁償すればそれで全て解決というわけではないと私は思います。では，非行を無くすにはどうすればよいか，これから周りの人が悪いことをしてしまったら，それに気付き，受け入れ，気に掛ける地域ぐるみの皆の温かい心で支えていくことが大事だと私は考えます。

私は，祖母から教えてもらった一人ひとりが明るい社会を築くための「小さなあかり」という言葉を自分の中にいつも持ち続けられるようにしたいです。

皆さんの中にある小さなあかりが集まれば，いずれ大きなあかりとなって，社会を明るく包んで誰もが安心して暮らせる社会になれると私は願っています。



未来を守るために
～私達にできる再犯防止の第一歩～

調布市立第七中学校　一年　山下（やました）　真輝（まき）

私は，この作文を書くにあたり，罪を犯した人に対して自分自身がどのようなイメージを持っているのか，書き出してみた。「こわい」「近寄りたくない」「また悪いことをするのではないか」などといった考えが挙がった。

しかし，再犯に至った理由を新聞やインターネットで調べていくうちに，私がもっているような偏見が一番の問題ではないか，と考えるようになった。

再犯の動機として多く挙がるのは，仕事に就けず生計を立てられない，というものだった。では，なぜ仕事に就けないのか。それは，私が持っていたような偏見が社会全体にあることが理由だ。つまり，犯罪歴を嫌がり雇うことをためらってしまう。そして，仕事に就けないことで，お金の面だけではなくやりがいも得られないため，自己肯定感が下がり自暴自棄になってしまう。その結果，社会とのつながりが持てず，孤独感から再び社会を恨むようになる。

そして，もう一つの問題は，出所した後に住む場所がないことだ。犯罪歴があると家を借りることが難しい。住所がないと就職のための面接すら受けられないことが多い。それだけでなく，何より安心して帰ることができる居場所自体がないのだ。

さらに，長く刑務所に入所していた人は，十分な教育が受けられておらず，また仕事をした経験も少ない人が多い。それによって，就ける仕事が極端に少なくなってしまう。

再犯率が高いということは，犯罪歴のある人にとっても不幸なことだが，社会にとっても新たな被害者が出るなどマイナス面が大きい。つまりこれは，社会全体で解決すべき問題なのだ。社会的な解決策として，住む場所の提供，就職先の仲介，孤独にしないためのコミュニティの提供，教育や技術習得の場の提供などやらなければいけないことはたくさんある。しかし，このような問題を中学生である私が直接解決することは難しい。では，これらに対して，私達は何もしなくてよいのだろうか。

今回のテーマに沿った調べ学習を深めていく中で，私は小学生の時のクラスメイトＡ君が思い浮かんだ。Ａ君は，何かあるとすぐに手が出てしまう質で，口調もいつも荒かった。他人が嫌がることをしたり，物をわざと壊したりするため，私も含めみんなＡ君に「悪い奴」というレッテル

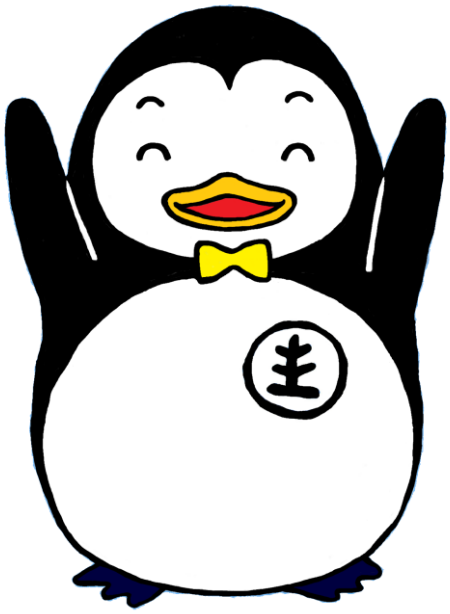
を貼っており，Ａ君と関わることを避けていた。しかし，卒業後にＡ君の家庭に問題があり，家に安心できる居場所がないということを知った。つまり，Ａ君は寂しい気持ちを暴力で紛らわせていたのではないか。もしその時にＡ君の状況を知り，少しでもクラスメイトがＡ君の気持ちに寄り沿えていたのなら，Ａ君は変わっていたのではないか。

問題には必ず何かしらの原因があり，それを知ることが解決の第一歩であるのだ。そのために私達は様々な方向から正しい情報を得て，それを多面的に考察する力をつけることが必要だと思う。「犯罪や非行を起こす人は悪い人」と短絡的に考えるのではなく，そうせざるを得なかった背景を知り，根本原因を突き止めることが必要である。

また私たちは，メディアリテラシーを高めることもしていかなければならない。再犯についてネット検索した時も，明らかに正しくない情報がたくさんあった。多面的な考えをするにはその元となる情報が正しくなければならない。何が正しい情報で，何が偽りであるのかを判別するスキルを身に付ける必要もある。

最近は，ＳＤＧｓやダイバーシティなどの言葉がよく聞かれるようになった。しかし，このような考え方は，教科書的には理解できても実際にその考えで行動できるとは限らない。私もこのような考え方は理解できていたはずだったが，冒頭にあるような偏見を実際に持っていた。

犯罪や非行を起こした人々が「明日もここにいたいと思える社会」にするための特効薬はない。しかし，そんな社会に一歩でも近づくために私達世代にできることは，このような社会的な問題を私事として真剣に考え，広い視野と正しい知識をもつことだ。その上で多面的に考察する意識を持ち続け，行動することだと思う。かつてのクラスメイトＡ君にも今の私なら，返事は帰ってこなくとも，毎日変わらず笑顔で挨拶をするという一歩は踏み出せるのではないか，と思えた。



支え合って生きていく

調布市立第八中学校　二年　　矢野（やの）　瞳（ひとみ）美

人間は，周囲と違う行動をとる人や，ほとんどすべての人が持っているものを持たない人を，自分と周囲の安全のために受け入れないことがあると私は考えている。

私は，スマートフォンを持っていないというだけで，一番仲がいいと思っていた友人とその友達から仲間外れにされたことがある。その時の仲間外れにされたショックと周囲の視線がとてもいたかったことをよく覚えている。この作文コンテストの話を聞いて私は，犯罪や非行をした人の中で，更生しようとしている人へ向けられる視線はとても厳しいだろうと思った。そして，私と同じように仲間外れにされてショックを受けるのではないかとも思った。

スマホが無いというだけで仲間外れにされた時の気持ちは最初，孤独感や悲しみでいっぱいだったが，徐々にその感情は激しい恨みや怒りに変わっていった。もしも，犯罪や非行をした人が社会から外され，私と同じようなことを思ったとしたら…。恨みや不満，いらだちなどで感情的になり，それが原因で再犯に及ぶ可能性がある。

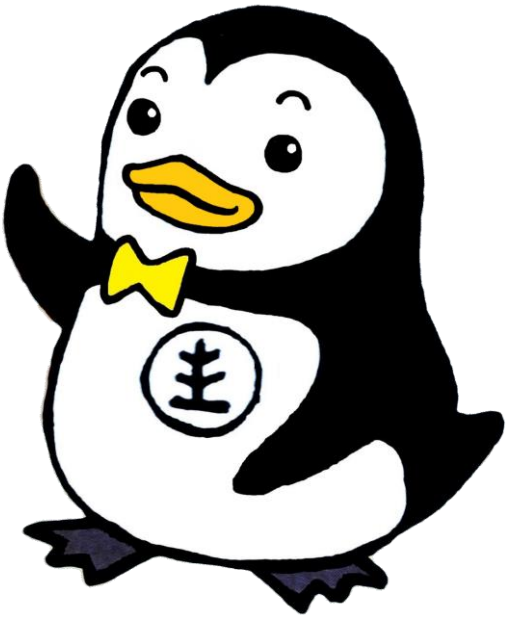
そうならないためにも，私は犯罪や非行をした人を偏見や決めつけ，「自分や周囲と違うから」という理由で受け入れることを拒否してはいけないと思う。かならずしも犯罪者が悪人というわけではない。もちろん，被害者やその家族などに無理にゆるして仲よくしようと言っているわけではない。犯罪や非行は社会のルール上では悪いことだし，被害者らのことを思うと，けっしてゆるされる行為ではない。ただ，犯罪や非行をした人も，親や周囲の人間の影響で犯罪や非行をしてしまったのだとしたら，彼らもある意味被害者だろう。

私たちは，なぜその人物が犯罪や非行をしてしまったのかを考え，彼らの新しい生活をサポートしつつ，見かけた時はあいさつをしたり，世間話をしたりして，彼らが孤独だと感じないようにするべきだと私は思っている。できるだけ普通にコミュニケーションをとり，「自分は受け入れてもらえた」という安心感をもってもらいたいし，最終的には支え合い，思いやりを持ってせっすることができる関係を築けるとなおいいと私は考えている。

周囲の人間からの影響力はとても強い。それこそ，人の性格や人生を変えてしまうほどだ。だからこそ，周囲の人間が更生しようとしている人とどう付き合っていくのかは，彼らの今後の人生においてとても重要なことになる。

再犯をなくし，よりよい社会を築くため，そして私のように受け入れてもらえない孤独を感じる人が一人でも減るようにするためにも，積極的にコミュニケーションを取ることは大切だと思う。

一人でも悲しい思いをする人や犯罪・非行が減り，がんばって更生する人が増えることを私は心から願っている。



私にできること

調布市立第八中学校　二年　　木下（きのした）　里乃（りの）

「大丈夫ですか」

私はこの短い言葉すら掛けることができなかった。ニュースで犯罪や非行の内容を毎日のように目にする。私はなぜそんなことをするのか理解ができなかった。しかし，犯罪や非行をした人はみんな理由があるのかもしれない。

友達と遊びに行った時，せまい路地に男性が二人で話している所を偶然目にした。その瞬間は何も感じなかったが，その直後茶色い封筒から高額な紙幣を取り出し渡している場面を見た。お金を渡している人も受け取っている人もとても不安で怖くて焦っている顔をしていた。私は絶対にしてはいけないことをしていると思い一瞬立ち止まり声をかけるべきなのかとても考えた。その時間は一秒もなかったと思うがとても長く感じた。私は考えた結果，結局見て見ぬふりをして通りすぎてしまった。私は怖さと自分には関係ないという思いで逃げてしまった。しかし，自分があの時声を掛けたら何か変わっていたのかと思うと後悔で押しつぶされそうになった。同時に，私が今まで気づかなかっただけで，私の町や身近な場所で犯罪や非行があることがショックで信じることができなかった。私は大丈夫。私は関係ない。そんな気持ちが犯罪や非行を増やしている原因なのかもしれない。私が見た二人の男性は犯罪をしたくてしているように私は見えなかった。とても不安な顔をしていた印象が強かったからだ。二人の他にも犯罪や非行をした人たちの中には家族との問題，苦しい生活をしている，高齢・障害，依存など不安や生きづらさなどの様々な理由を抱えていると思う。

犯罪や非行をなくすためには，周りの人の支えや優しく温かい心が大切だと思う。犯罪や非行をしてしまう人は，何か理由があって，不満があるからだと思う。その時に，周りに大切な人がいたり，楽しく明るい社会を作ったり，相談できる人がいたら，犯罪や非行をする人は少しでも減るのではないだろうか。私の場合は，家族が一番信頼でき，心強い存在だ。家族の他にも友達や先生，誰でも良いから一人でも自分にとって大切な人を作れば，その人を思って行動できると思う。また，他人事ではなく，困っている人がいたら手を差し出したり，相談に乗ったり，声を掛けたりすることで少しでも心が軽くなるかもしれない。また，犯罪や非行をおこしてしまった人が身近にいたら，責めたりせず，優しく支えることで，反省し立ち直ることができ

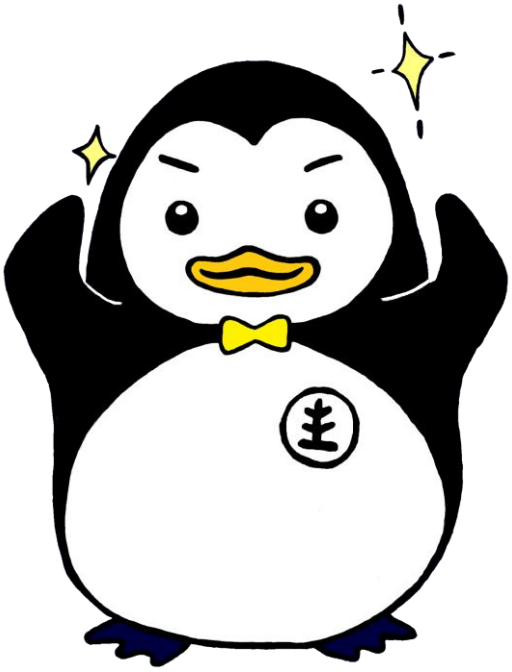
れば，罪を犯すことがなくなり安全で明るい社会が作れると思う。

犯罪や非行のない社会を作るには，一人一人の行動が大切だ。他人事ではなく，自分に何ができるか考えて欲しい。しかし，人のために行動することは難しくとても勇気がいることだ。まずは，家族や友達など身近な人が困っていたら手を差し出して大切にすることで，自分に自信がつくかもしれない。

あのような体験がまたあったら，

「大丈夫ですか。」

次は勇気を出してこの言葉を堂々と言える強い人に私はなる。



相手を知ること

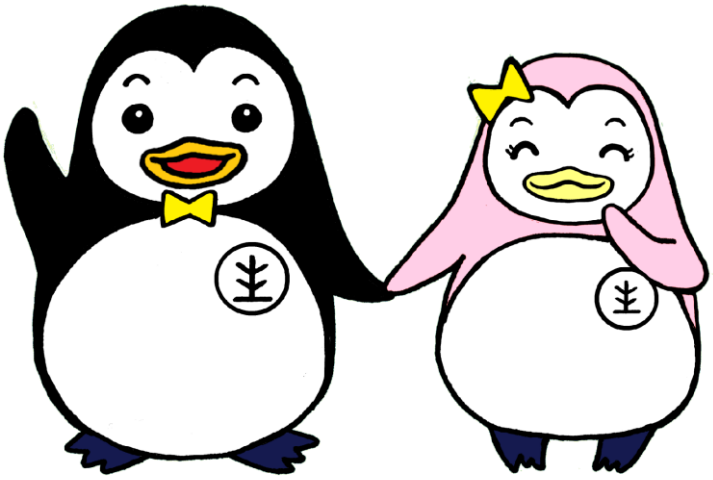
晃華学園中学校　三年　岡本（おかもと）　華奈（かな）

皆さんは罪を償い更生しようとしても，様々な困難が待ち受けていることを知っているだろうか。私はこれを一冊の本を通して知った。書名は『15歳のテロリスト』だ。本作品には少年犯罪を通して被害者と加害者の様，更生の難しさが書かれていた。例えば，被害者側の主人公は家族を殺した加害者を追うために加害者の家族と話す場面がある。そこで，加害者家族の生きづらさを知る。実名報道されたことにより加害者家族は社会から排除され，家には落書きをされたり，学校では虐められたのだ。これらは，事件の真相を知らない第三者によって行われたことであり，加害者側にとってとてつもない生きづらさを与えている。更生しようと思っても周りがそれを排除するという現状があると私は知った。では，なぜ第三者は更生しようとする者に危害を加えるのだろうか。私は，第三者に加害者を批判する権利も，被害者に助言する権利もないと考える。犯罪の裏にはどんな事があって，どうしてそうなってしまったのか。そして，加害者はどのような考えなのか，知る必要があるのではないだろうか。例えば，犯行の背景には，家庭環境やコンプレックス，ＳＮＳや虐めなど何かしらの生きづらさがあったのではないだろうか。もし，犯行の動機が社会からの排除にあったのなら，誰も加害者を批判できないのではないだろうか。

また，加害者達には，「少年法に守られているから大丈夫」という考えの人が多くいると知った。これは，法や刑罰についてあまり知らないことが原因である。そのため，法や倫理について幼少期から正しく学ばないといけないと考えた。しかし，普通に学校に通えている子，そうでない子がいる。そんな環境下にいる子達に十分な環境と質の高い教育を受けさせてあげて欲しい。これらは国や政府が世界共通で抱えている問題だろう。粉争や戦争，発展途上国，地位など原因は様々であると思うが世界ではまだまだ悲しい思いをしている人は多い。わたしはそんな人達を救うために自分にできることを常に考えて精進していこうと思う。

私が考えるに，社会をより良く，明るくするには相手を知ることが重要であると思う。相手の大切にしていることは何か，相手はどのような背景でどうしてそうしたのか，知れば，相手を尊重することも，優しくすることも出来るはずである。社会が，世界が笑顔であふれるように私もで

きることをしていきたい。



更生ペンギンのホゴちゃん，サラちゃん

“社会を明るくする運動”

調 布 市 推 進 委 員 会